



約束の家
— 兎追ひし彼の山 —

父との約束を果たしてこの家は経った。
ふるさとを後にして三十余年、
施主は凜としてこう言った。
「父が残してくれた母屋を活かしたい」
：地元の工務店としても期するものがあつた。
丹波に数多く残る旧家屋に、再び息を吹き込むこと。
それが我々工務店の仕事であると。
田舎には田舎の暮らしがあり、又、丹波には丹波の
営みがある。ふるさととは遠い昔の記憶ではないのだ。

— 山は青きふるさと
水は清きふるさと —



◆ ヒストリー

大学進学を機に、ふるさとに父と母を残し、以来ずっと施主は都会で暮らしてきた。

結婚し、二人の子をもうけ、気が付けば35年の歳月を数えていた。

ある夏の日、帰省した折に、父が訥々と語った言葉が、耳から離れることはなかった。

「どこに住もうと、お前の家はここにある。忘れるな。」
長らく社宅に暮らした施主だった。特段それを不自由に感じることはなかったが、けれどもマイホームを構えることのためにあったのは、父と交わした「約束」のためだった。

◆ コンセプト

「父が残した母屋を活かしたい」が施主の最優先事項だった。母屋の北奥で、陽のあたらしい離れをわざわざ再築するという考えは、設計者として毛頭なかった。

「主たる母屋」と「従たる離れ」。

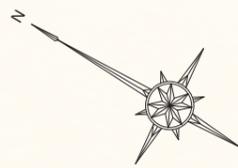
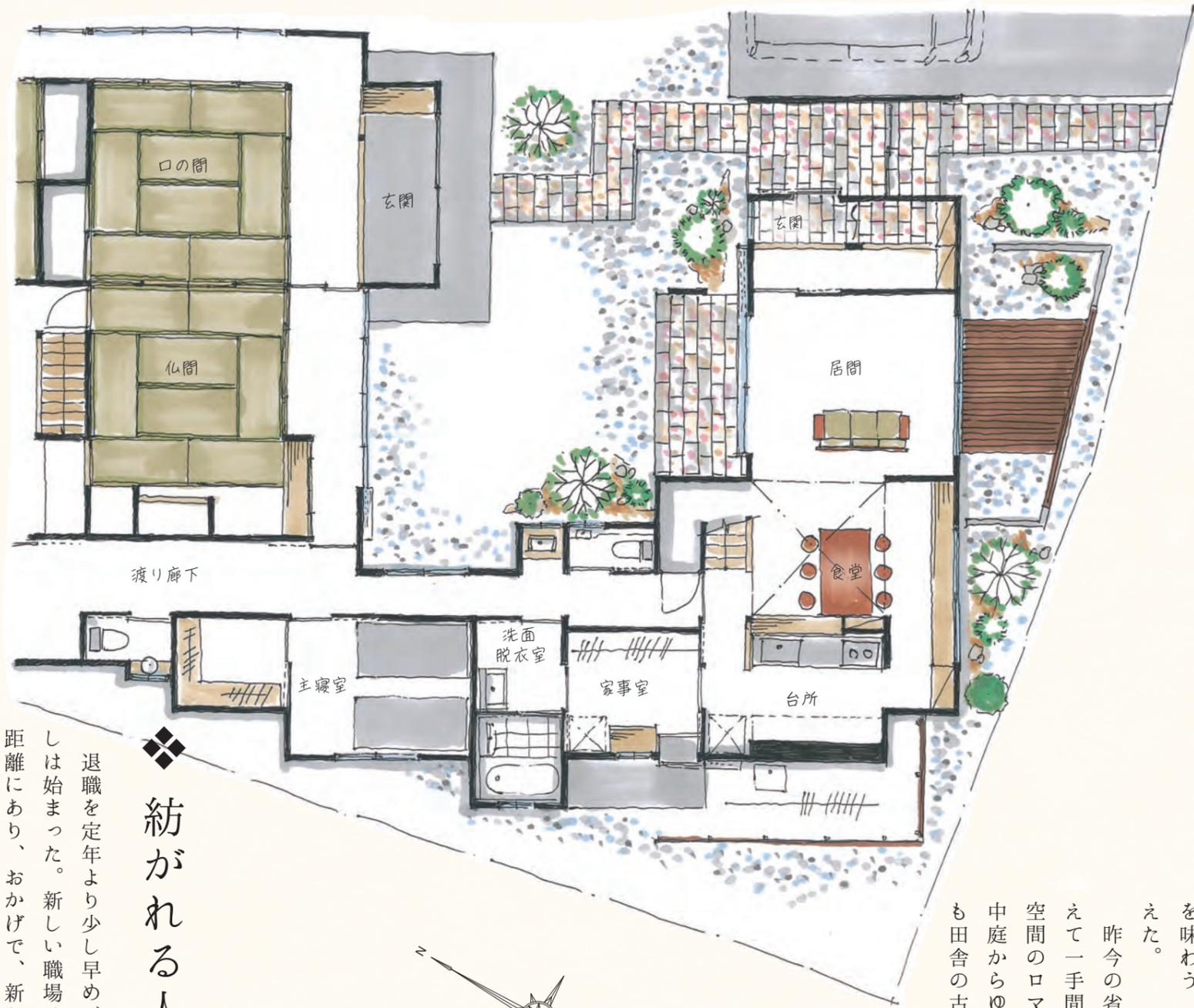
母屋と離れの既成の役割を、この際入れ替えるのはどうか。幸い母屋の前部には、手を付けられていない十分すぎる土地があった。

田舎家らしい間口の大きな入母屋の家屋は、今度は奥座敷として来客を受け入れる。

新しい家では日常の生活を送り、古い母屋では日常にはない、例えば週末とか、休日の前夜などに、上質な休息を味わう、言うなれば非日常の空間を作り出したいと考えた。

昨今の省エネルギーや、スマートハウスとは違う、敢えて一手間かける、敢えて外気を感じる暮らし。そんな空間のロマンを味わってほしいと願い計画した。

中庭からゆるると伝わる花木の匂いや、葉擦れの音にも田舎の古き佳き趣を感じられるように。



◆ 紡がれる人生 (施主談)

退職を定年より少し早め、ふるさとでの暮らしは始まった。新しい職場は徒歩で通勤できる距離にあり、おかげで、新たに時間とゆとりを手に入れた。

娘もこの地元で職を得て、ともに暮らすようになったのは嬉しい誤算だった。

ご近所さんから「うちの畑で採れたから食べて」と、四季折々に頂戴する新鮮な野菜の美味なることに、驚きの毎日だ。

月に一度、気の合う者同士が集まって、母屋の座敷で酒を酌み交わす夜が、やけに楽しくて仕方がない。

趣味の道具の手入れや、映画鑑賞も、離れのあ

る暮らしのおかげで、心置きなく楽しめる。桜の季節と紅葉の季節ならなおさら格別なのだ。



▲ 引渡後の暮らしの様子

建築面積： 118.44 m²
1階床面積： 106.66 m²
2階床面積： 30.63 m²
延床面積： 137.29 m² 41.53坪
構造：丹波市産 杉・檜を使用

外部仕上げ：屋根 = ガルバリウム鋼板
外壁 = 無塗装サイディング
リシン吹付、一部焼き板張り

内部仕上げ：天井 = 珪藻土クロス貼り、一部杉板張り
壁 = 左官珪藻土塗り
床 = 松フローリング張り